

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて② 「西浜いも」を育てた芋代官

大田町 石賀了

出雲市湖陵町

八月下旬から、湖陵町のくびき海岸道路の「どんとこい市場」や国道九号沿いにある「いも直売所」にサツマイモ「西浜いも」が並び始め、町は一気に活気づく。JAいもには「湖陵かんしょ生産組合」があり、二十六人の組合員が町内の十七ヘクタールで「紅あずま」を栽

培して、特産化を進めている。「西浜」というのは地域の名前で、湖陵町のうちの差海、板津、大池という三つの地区の総称で、ほぼ、国道九号から海岸線側のことをいう。この地域は砂丘地帯で、昔からサツマイモの栽培が盛んであり、昭和三十年代には県内随一の生産を誇っていた。一時期大きく減産したが、昭和

は井戸さんへの感謝の気持ちでも持ち続けており、PRチラシにも「各地に石碑を建てると書かれています。湖陵町には井戸さんの頌徳碑が四基ある。西浜の三地区にはそれぞれ一基ずつ、そして国道九号から少し南側の砂子地区に一基建てられている。砂子地区の碑が最古で嘉永七年（一八五四年）、ほかは二基が明治時代の建立、一基は建立年不明である。

掛軸と由緒書は明治三十七年のもので、近年どころも表装をし直しており、大事に桐の箱に収められている。掛軸は全体が幅四十九センチ、高さが百七十四センチ。肖像画の部分は幅三十六センチ、高さが八十七センチである。この肖像画はユニークで、井戸さんがサツマイモの上に座っており、鼻の下にはひげを蓄えている。

地区のサツマイモ栽培農家の皆さんが持ち寄ったサツマイモが供えられ、ボランティアの女性の皆さんによって芋粥が参加者にふるまわれる。紹介した写真は去年のもの。今年の祭りはこれからなので、必ずお参りさせていただくことを約束した。



▷芋代官由緒巻物。巻末に「板津村内所有」とある

努力によつて「西浜いも」のブランドが定着した。かんしょ生産組合で、板津地区には、公民館に井戸さんの肖像画の掛け軸と由緒書が地区の宝として保管されている。なぜ公民館に肖像画と由緒書が残っているのか、板津区長の三原健史さんに尋ねてみたが、詳しい事情は不明とのこと。た

由緒書は、二・五メートルに及ぶ長い巻物で、井戸さんの業績と、後世の人々がそれに感謝するため石碑を建立し寺々による仏事が行われていることが書かれている。浜田市の寺院に伝わる「暉恩伝」（前号で紹介）や、大田市内の寺院に残る「甘諸代官泰雲院君伝」と同様のものと思われる。

そして、今でも毎年十一月二十三日に館内に肖像画をかけ、近くの寺院の住職が由緒書を朗読して「いも代官まつり」を催している。地区のサツマイモ栽培農家の皆さんが持ち寄ったサツマイモが供えられ、ボランティアの女性の皆さんによって芋粥が参加者にふるまわれる。紹介した写真は去年のもの。今年の祭りはこれからなので、必ずお参りさせていただくことを約束した。



▷板津公民館の「いも代官祭り」（昨年写真） 板津公民館提供



△「泰雲院」の肖像画。ひげの井戸さんがイモの上に座っている

また、生産者の中には、毎年欠かさず、大森の井戸神社にお参りをしていられる方もいる。「井戸さんのおかげで芋を作り、生活することができていますから」と話される笑顔が心に残った。



△差海の観音寺前の道路沿いに建つ井戸さんの碑

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて⑫

鳴り砂の町の「いも塚」

鳥取市青谷町

大田町 石 賀 了



△ 青谷町の「いも塚」。サツマイモの形か？



▽ 下の石に彫られた「工 川六」のサイン

約五百基ある井戸平左衛門(以下「井戸さん」)の頌徳碑の中で、最も東にあるのが鳥取市青谷町の碑である。青谷町は鳥取市の一番西の町で、日本海に面し、海岸は鳴り砂の浜として知られている。「鳴き砂」ではなく「鳴り砂」と呼んでいるのが仁摩町の琴ヶ浜海岸と同じだった。取材も何となく親戚に行ったような親近感がわいた。

青谷町の井戸さんの碑は安政三年(一八五六年)に建てられた。正面に「泰雲院殿義

進んで寄付を寄せ碑の建立にはこぞって工事に加わり、肩をたたきあつて碑の完成を喜んだという」とある。

碑は県立青谷高等学校の西側の高台にあり、自然石を二段積んだ上に重量感のある碑石を乗せてある。正面に「泰雲院殿義

塚ふれあい広場」になっている。この碑の制作者は青谷町出身で鳥取県内に多くの作品を残した石工の「川六」こと「尾崎六

良兵衛」。川積集落に住んでいたことから、自分の作品によく「川六」のサインを彫っている。作品は狛犬や常夜灯から鳥居まで幅広いが、地元産の石を使い、自然石のフォルムを活かしながら、既成の形にとらわれず、凹凸の形をうまく利用して積まれている作品が多い。

井戸さんの碑も、三つの石が自然石そのままの形に見える。台石には波に浸食された海岸の自然石が使われており、いくつか穴が開いている。

今回の取材では、川六の研究家で「川六ファンクラブ」の廣富靖さんにお話を聞き、石碑や近くの川六の作品の場所まで案内していただいた。井戸さんの碑にも「工 川六」と彫られているが、廣富さんによれば、碑を移設した際に碑石の設置位置を間違えたために「石」の文字が隠れたのだという。

鳥取県東部には井戸さんの碑はこれ一基しかないが、興味深い資料がある。この碑を建てた九年後の慶応元年に、潮津村と芦崎村(いずれも現青谷町)の庄屋が鳥取藩に対して、井戸さんの碑を建てたいと願ひ出た文書が残っているのだ(「鳥取県史」

た。サツマイモは大森から弓浜半島、そして東へと伝わったのかと思っていたが、そうではなく、芦崎(現青谷町)の船問屋の蔵本屋弥七が商用で石見に行った際に、井戸さん由縁の種芋を持ち帰って広めたという(「青谷町誌」昭和五十九年発行)。

井戸さんの研究家である境港市の学頭和夫さんの著書によれば「弥七が村人に呼びかけ碑を建てることになったが、人々は進んで寄付を寄せ碑の建立にはこぞって工事に加わり、肩をたたきあつて碑の完成を喜んだという」とある。

岳良忠居士、左わきに「石州銀山附御代官俗稱/井戸平左衛門/安政三年建之世話人/弥七/權十」と彫られている。高さ百九十センチ、中央の幅百センチ、中央部の厚さ八十センチで、堂々とした存在感があり、寸法より大きく見える。

当初は「新屋敷五ツ辻」とい

う、人々がよく通る、道路が五本集まる交差点に建てられたが、昭和四十六年の道路拡幅工事の際に近くに移された。碑の近くには解説もあり回りは「いも塚ふれあい広場」になっている。

この碑の制作者は青谷町出身で鳥取県内に多くの作品を残した石工の「川六」こと「尾崎六

良兵衛」。川積集落に住んでいたことから、自分の作品によく「川六」のサインを彫っている。作品は狛犬や常夜灯から鳥居まで幅広いが、地元産の石を使い、自然石のフォルムを活かしながら、既成の形にとらわれず、凹凸の形をうまく利用して積まれている作品が多い。

井戸さんの碑も、三つの石が自然石そのままの形に見える。台石には波に浸食された海岸の自然石が使われており、いくつか穴が開いている。

今回の取材では、川六の研究家で「川六ファンクラブ」の廣富靖さんにお話を聞き、石碑や近くの川六の作品の場所まで案内していただいた。井戸さんの碑にも「工 川六」と彫られているが、廣富さんによれば、碑を移設した際に碑石の設置位置を間違えたために「石」の文字が隠れたのだという。

鳥取県東部には井戸さんの碑はこれ一基しかないが、興味深い資料がある。この碑を建てた九年後の慶応元年に、潮津村と芦崎村(いずれも現青谷町)の庄屋が鳥取藩に対して、井戸さんの碑を建てたいと願ひ出た文書が残っているのだ(「鳥取県史」

第十三巻)。これが安政三年の碑について後年提出したものか別の碑を建てようとしたものかは不明だが、新たにもう一基建てたいと願ったものと思いたい。

ともあれ、頌徳碑建設に対して、藩に願ひ出て許可をもらうという手続きがあったこともわかる、貴重な資料である。

青谷町の碑は「芋代官彰徳碑」として鳥取市の文化財に指定されており、「青谷のいも塚」と呼ばれている。米子市、境港市のもの合わせ、鳥取県内の十二の碑すべてがそれぞれの市の文化財に指定されていることになった。これもすばらしいことだ。

大田市から直線距離で約百四十キロ離れた地域でもあり、現在、井戸さんのことはあまり知られていないが、青谷のいも塚が草取りをされており、碑の近くに住んでいる方が時おり季節の花を供えておられるという。

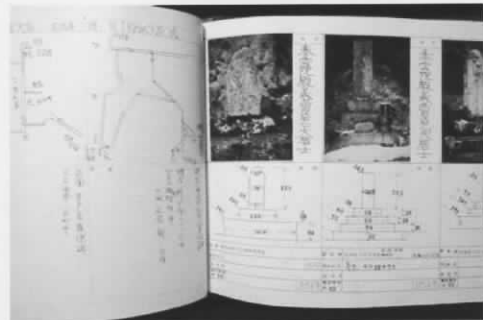
「川六ファンクラブ(青木清輝会長)」の廣富さんらは、昨年秋、収穫したサツマイモをいも塚に供え、井戸さんと川六を讃えた。廣富さんは「一回ではなく、今後も何らかの活動を続けていきたい」と話している。

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて⑬

530基の総数を調べ上げ 465基を踏査した

宮本 豊さんの偉業

大田町 石 賀 了



△宮本さんが収集、整理された資料の一部

「井戸さんの頌徳碑は全国に四百九十基」とか「約五百基」と、これまでの連載の中で何度か紹介してきたが、この数字は実は川合町の宮本豊さん(平成十八年没)が調べられた数字である。それまでは「かなりある」とか「百基以上」とか言われていたが、実際に調べ上げ、踏査したのは宮本さんしかいない。川合町吉永で農業を営んでいた宮本さんは、自宅のすぐ近くの建功寺の無縁墓の中に井戸さんの頌徳碑の塔身があるのに心を痛めていた。明治二十二年に

建てられたこの碑は長年の風雨で傷みが激しかったため、昭和二十年、やむなく台座を墓地に埋め、塔身は無縁墓地に残した。昭和六十三年の宮本さんの文章によると「記念にと思い(建功寺の碑を)写真撮影、保存をして後世に伝え、井戸公の恩恵の大きい事を現在の若い人に知っていただくたく、巡拝計画を昭和五十年にいたし、各図書館を廻り関係図書一切を記録、読書し、現在地一覧表を作成、順次巡拝。(中略)計画より十五年、未だ終了せず」とある。



△宮本 豊さん
の場所を手
書きの地図
に記したも
のをまとめ、
井戸神社に

るが、その数たるや二十冊を超える。ファイルには石碑の写真、刻んである文字、寸法、そして手書きの付近見取り図など、極めて克明な記録が残されている。農閑期を利用して、一人で、ときには夫妻で車や列車で出かけ、一基一基でいねいに記録していく。管理されていない石碑も多く、ときには草刈機を持参して草刈りをしながら訪ね歩いた。島根県内はもとより、広島県、鳥取県、岡山県まで、踏査した頌徳碑は四百六十五基。

私の場合は宮本さんの資料の一部を頼りに石碑を訪ねるので、それでもたどり着けないことが多い。そんな情報がない中で石碑を見つけないことがいかに困難なことだったかと思うと、気が遠くなる。まさに偉業だ。

資料、文献も克明に記録してあり、その数百八十冊。それを読破し、各地の図書館、公民館、資料館、郷土史家などを訪ね、一つ一つを確認した。残されている写真を見ると、雪景色だったり、夕方になったのか少し暗く写っているものもある。農閑期といえば夏か冬。厳しい季節の巡拝を想像すると頭が下がる。資料を調べていくと、調査がまとまってきたのが昭和五十五年。この時点で予定総塔社数四百九十九基、踏査数四百五十三基となっていた。平成元年では総数五百三十基、踏査数四百六十五基、未調査三十基、未踏査三十五基、となっており、後年は調査が次第に進まなくなっているのがわかる。地元の人でさえ知らないものも多かったことだろう。

昭和六十三年には市町村別の数の集計と、すべての碑の場所を手書きの地図に記したものをまとめ、井戸神社に奉納。石見銀山資料館などにも提供された。この時期以降、「井戸さんの頌徳碑は全国に約五百基」という根拠のある数字が公表されるようになった。もう一つ特筆すべきは、これらの資料のほとんどの文章が「ゴム印」で一文字ずつ押されていることだ。実に読みやすく、文字の間違いもないのだが、そのいいねいさにも頭が下がる。紹介した写真は奥さんからお借りしたもので、江津市清美町で平成九年に再建された頌徳碑の前で微笑む宮本さん。各地を踏査されたときもこんな服装だったのだろう、ジャンパーに作業ズボン、長靴だ。その服装には気負いもてらいもない。石碑の巡拝は宮本さんの生活の一部になつていたのである。かなり遅い時刻で少し写真は暗いが、頌徳碑が再建されたことに我が意を得たりといった表情だ。この写真の九年後、宮本さんは八十一歳で亡くなった。生前にお会いしてお話を聞けなかったのが残念でならないが、宮本さんの貴重な資料を活用させていただき、これからも井戸さんの頌徳碑の「巡拝」を続けて行こうと思う。

久手町では3か所で祭り 西川・刈田神社・柳瀬

久手町ではこの夏も、三か所で井戸さんの祭りが行われた。一つ目は西川交差点の石碑の前。今年には碑の周囲の整備後二十周年。「井戸さんを見守る会(田中正太会長、十五人)」が上・原岡自治会と子ども会に呼びか



△幟も新調してにぎやかだった西川の祭り



夜に祭りが営まれた刈田神社(上)と柳瀬(中)。下は刈田神社の井戸さんの祠

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて

大田町 石賀

了

14

今も毎年行われる「芋法座」 大森町上佐摩上

井戸さんをしのご集いは「芋法座(芋法事、芋供養とも)」と呼ばれ、今でも各地で行われている。最もいいいな芋法座では、井戸さんの遺徳をつづつた「暉恩伝」とか「頌徳文」、「讃徳文」という文章を読み上げるこ

とになっている。「甘藷代官略伝」が今も残る大森町の上佐摩自治会でも、古くから毎年、芋法座が催されてきた。以前は当番の家が会場となり、最も盛んな時期には四か寺から住職を招き、法座の後、女性陣が作った料理を食べながら夕方まで歓談したという記録もある。今年のは法座は四月一日に催され、井戸さんの位牌の前に、大森町の西本寺の住職さんがお経をあげた後、甘藷代官略伝の一部を朗読し、法話を聞いた。

井戸さんの頌徳碑も修理



△修理が終わって記念写真。下は上佐摩上の井戸さんの碑

上佐摩上自治会には、大森町では井戸神社以外としてはただ一基という、井戸さんの頌徳碑がある。安政三年(一八五六年)建立という比較的古いもの。近年傷みが激しく、一番下の台石が崩れて全体が傾いていたため、平成二十二年、自治会長だった



木曾重美さんの提案で修理された。経費は自治会で負担する計画だったが、左官業の水田理さんが無償で修理を買って出た。塔身を据え付ける日には上佐摩上・下の人たちが駆けつけ、みんなで塔身を元に戻した。地元の人たちの力で建てられた頌徳碑が、百五十六年の時を経て再び整然とした姿を取り戻したのだ。「井戸さんの石碑をおろそかにはできない」という地元の方々の気持ちは今でも持ち続けられている。

け、七月二十二日、にぎやかに祭りが行われた。「井戸明神」の幟も二本新調。神事の後は

子どもたちに井戸さんの功績を

紹介した。二つ目は刈田神社。ここには境内社としての井戸神社があり、石組の台座の上に立派な石造りの祠が鎮座する。

祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

の祠が鎮座する。祭りは毎年七月二十五日の午後七時半からと決まっている。以前は子どもたちも多くお参り

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて⑮

大田町 石 賀 了

二つの井戸公碑マップ



△大田ロータリークラブの「頌徳碑大田市内分布マップ」

昨年十一月、大田ロータリークラブは、大森町の町並み交流センターで市民講座「井戸平左衛門正明公の功績を今に活かす」を開催し、講師に井戸さんの墓がある岡山県笠岡市の威徳寺の長田暁一住職などを招いての講演会と、町並みを散策する観光客らにふかし芋の配布をした。

大田市と笠岡市は友好都市になつてゐるが、これは昭和六十二年に両市のロータリークラブが友好クラブになつたことがきっかけになつたもの。今回の市民講座は石見銀山の世界遺産真を撮影、その場所を地図に落

登録五周年を記念して、井戸さんの功績を再度検証しようと開催された。このときの資料として配布されたのが、井戸さんの「頌徳碑大田市内分布マップ」(A4判十二ページ)だ。

川合町の故宮本豊さんの調査で、市内には約百基の碑があることがわかつてゐるが、どこにどんな碑が分布してゐるかを写真と地図でまとめたのは今回が初めてであり、貴重な資料となつた。同クラブでは、宮本さんの調査結果などをもとに一基調べ、現地を訪ね歩いて写真

とすという作業を二か月間行ひ、この日にやつと間に合わせた。ただし、確認できないものや、調査の間に「まだあるらしい」という情報があつたため、この日はカラーコピーで配布した。その後の調べで百一基(印刷後にさらに一基)あることを突き止め五百部印刷、市内の小・中学校などに配布したが、問い合わせも多く、すぐになくなつ

たため、千部の増刷を決めた。井戸さんへの関心が薄くなつてゐるのを感じていたが、この反響の大きさをすると、「井戸公人気」はまだまだ健在のようであつた。同クラブの調査がいかにかに困難なものであつたかは容易に想像できるが、それを乗り越えて一冊のマップを完成させられたことに大いなる敬意を表したい。

多津子さんによると、それぞれの碑に番号とひらがなを一つ書いた木札が立ててあり、全部の碑を回つてひらがなを集めると一つの文になるといふ。その文を完成させると景品がもらえるといふ「芋地蔵完拝ラリー」を現在も継続実施中だといふ。私も数基訪ねてみて木札も確認したが、県道から入つてゐる石碑では、県道沿いに「芋地蔵こちら」の小さな標識もあり、頌徳碑探しを容易にする工夫もうれしかった。

浜田市弥栄町の「芋地蔵さん拝観マップ」

浜田市弥栄町には「芋地蔵さん拝観マップ」がある。同市弥栄支所が故郷の宝を再認識しようと平成二十三年度に作成したもので、A3判を六つ折りにし

た持ち歩きやすいもの。町内の地図と、全二十四基の頌徳碑が写真入りで紹介されている。碑の紹介では碑銘、所在地、建立年月のほか「芋地蔵のつづやき」が紹介されているが、「毎年九月の第一日曜日にはサツマイモをいただきます」「集会所のすぐ傍なので安心です」などと書かれてゐる。ともすると硬くなりがちなのこの種のパンフレットだが、表紙の青空をバックに立つ石碑の写真と「芋地蔵のつづやき」がとても親しみやすいものになつてゐる。

【お詫びと訂正】前号で紹介した久手町の「刈田神社」は、正しくは「新田神社」です。関係の皆様は深くお詫びし、訂正いたします。



▷弥栄町の「芋地蔵さん拝観MAP」

井戸公没後280年記念特別展をにぎやかに開催

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて (番外) 大田町 石賀 了

市内100基の井戸公碑の写真や 恒松隆慶さんの所蔵品を一挙展示

大田市文化協会では六月五日から九日まで、市民会館中ホールで「井戸平左衛門公没後二百八十年記念特別展」を開催し、約三百人の皆さんに鑑賞



▽壁一面の頌徳碑の写真は圧巻

大田市文化協会では六月五日から九日まで、市民会館中ホールで「井戸平左衛門公没後二百八十年記念特別展」を開催し、約三百人の皆さんに鑑賞

しているいただきました。サツマイモを導入して領民を飢饉から救った第十九代石見銀山領代官井戸平左衛門公の没後二百八十年を記念して開催した。井戸公の遺徳を偲んで市内に百基も建てられている頌徳碑の写真や、井戸神社所蔵の資料、井戸神社の復興に尽力された長久町の恒松隆慶さんの資料などを展示し、井戸公の遺徳とそれを後世に伝えようと奮闘した先人たちの息遣いを感じてもらおうと企画しました。

開催のきっかけとなったのは、昨年大田ロータリークラブの皆さんが市内の頌徳碑の写真を撮って冊子にまとめられたことでした。川合町吉永の故宮本豊さんの調査で、井戸公の頌徳碑は中国地方を中心に全国に五百三

十基あることが確認されており、市内には約百基の頌徳碑がありますが、すべての写真を掲載し、位置図まで示された同クラブの冊子は貴重な資料となりました。この写真データをもとに、百基の写真とA4サイズにプリントし一堂に展示して、井戸公の遺徳の大きさと、頌徳碑を建てた私たちの先輩諸兄の思いを伝えたいと考え、企画がスタートしました。

できるだけ多面的な展示内容にするため、多くの皆さんに協力をお願いしたところ、次のように貴重なものをたくさん借用することができ、かなり充実した意義深いものとなり、来場された皆さんは一樣に長時間かけて熱心に鑑賞されました。

○ 宮本豊さんの調査資料 主



◀一樣に熱心に見ていただきました

読み上げられる巻物。満行寺の石水住職のご厚意で実物を全巻(約五メートル)展示。

○ 井戸公の遺訓書 井戸神社に伝わるもの。写真で紹介。

○ 恒松隆慶さんの資料 井戸神社復興のための活動や写真、著書「井戸明府」のほか、広い交友関係で収集された掛け軸などの所蔵品の一部を展示。

石見銀山資料館でも協賛して企画展「神様になった代官井戸平左衛門」を五月二十五日から七月十五日まで開催、刀や遺訓書の実物などを展示されました。今回の特別展は市内外からの反響も大きく、特に市内の各地からは「うちの近所にも井戸公碑がある」という新情報もかなり寄せられました。

また、市内百基の頌徳碑の写真パネルも好評で、特別展終了後も各地で展示が続いています。

体験型井戸公講座を開催

特別展の続編として三回シリーズの井戸公講座を開催します。

【第1回】「井戸平左衛門とはどんな人」 8月10日 13:30。講師：石見銀山資料館学芸員

【第2回】「伊達金三郎と青木秀清」 8月18日 13:30。講師：同資料館館長 仲野義文氏

いずれも会場は仁万まちづく

藤原雄高氏

【第3回】「井戸公頌徳碑探訪」 8月31日 8:20。大田市民会館を出発し、バスで大田市内、江津市内の頌徳碑数基を探訪します。講師：大田市文化協会会長 石賀 了 参加費千円。

りセンター、資料代三百円。

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて⑬

多くの命をつないだサツマイモ ―上―

大田町 石 賀 了

六月の井戸公の特別展、八月に三回行った体験型井戸公講座を通じて、たくさんの人に出会い、いろいろなことを学ばせていただいた。

大田市民なら知らない人はいない(はずの)井戸平左衛門公。その遺徳を偲んで全国に五百基以上の頌徳碑が建てられており、その功績の最大のもはサツマイモの導入である。

しかし、サツマイモに対する評価は、そのころと現在とは大きく違う。私もそうだが、「飢え」を知らない現代人がそのころのサツマイモの価値を想像するのは難しいかもしれない。五百基以上の頌徳碑が建立される要因となったサツマイモについて、今回と次号の二回で考えてみたい。

日本人の主食は「米」だったが、江戸時代には「年貢」という税金の対象として米づくりが奨励された。多くの農民にとって米は自分たちが食べるために

はなく、お上に納めるために作った。それでも、豊作の年は食えることができた。ところが、

出来の悪い年はとても米を食べる状況ではなかった。この数十年に一度の飢饉がやってくる。享保(一七三二年)、天明(一七八〇年代)、天保(一八三〇年代)が江戸三大飢饉と呼ばれるが、江戸時代は全期を通じて寒冷で凶作が絶えなかつたという。まして、稲作の適地はそう多くない。

不作の年でも腹いっぱい食べられる何かは、多くの貧しい庶民にとつてのどから手が出るほど欲しかったに違いないが、そんなものはどこにもない(みんな知らない)。そこに、主食の代わりになり、年貢の対象にもならず、おいしくて土地を選ばずどこでも栽培できるサツマイモがもたらされたのだ。疑心暗鬼で栽培し、実ったサツマイモを食べたときの農民たちのうれしそうな顔が浮かぶ。「こ

れで飢えずに済む。家族みんなが生きていける」そう思ったに違いない。

江戸時代の代官は「幕府の年貢増徴策にそつて収奪を強める役割と、その反面では年貢の確保のために農民を保護育成していかねばならない、一見して矛盾する二つの性格を備えていた」といつてよい(「江戸幕府の代官」村上直)。「そんな立場にありながら、年貢の対象にならないサツマイモを薩摩から手に入れた井戸公の英断は神がかり的といつていい。



△今でも田畑のちよつとしたスペースでサツマイモは作られている

サツマイモの原産地は中南米で、十五世紀半ばから始まった大航海時代に二つのルートにのつて中国まで伝わったとされる。中国の文献「農政全書」には「甘藷十三勝」として十三の優れた点を上げている。①わずかな土地から多く取れる。②味がよい。③健康食である。④少数の種芋で翌年は広く栽培できる。⑤風の被害を受けない。⑥主食となり飢饉の備えとなる。⑦多方面の用途がある。⑧酒の原料となる。⑨乾燥させて保存がきき多様に利用できる。⑩生食も煮食もできる。⑪栽培に手間がかからない。⑫掘り取りの苦勞がいらぬ。⑬虫の害が少ない。

こんな条件を備えた野菜はほかにない。だからこそサツマイモは世界中で受け入れられ、広まつていった。我が国に最初にサツマイモをもたらしたのは琉球(沖縄県)の野國總管(野國は琉球と明(中国)を往来する「進貢船」の事務長(總管役)で、野國村(現嘉手納町)出身の民間人。たいへんな努力の末に總管になり、福建省を訪ねる。そこで出会つたサツマイモを見て、食べて、これこそが食糧事情がきわめて貧しい故郷を救つてくれると持ち帰り、栽培を始めた。一六〇五年のことだ。その働きに着目した役人(地頭)の儀間眞常が施策としてサツマイモを普及させ、十五年後には琉球全体に広まつたという。それほど、米や五穀の補助食料は渴望されていたのだ。

琉球から九州本土にサツマイモを持ち帰つたのは薩摩半島の南端の寒村、山川郷の前田利右衛門である。開聞岳の噴火によつて火砕流堆積物が広がり、およそ農作物の栽培には不向きな土地。百姓であり交易船の水夫、だつた利右衛門は一七〇五年に琉球でサツマイモに出会い、薩摩に持ち帰つて植え広めた。シラス台地の山川村でも、サツマイモはよくできた。九州本土に上陸したサツマイモは、ここから日本中に広がつていく。

(以下次号)

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて⑬

多くの命をつないだサツマイモ ー下ー

大田町 石 賀 了

長崎県対馬では、サツマイモは「孝行芋」と呼ばれる。一七一五年、農家の二男、原田三郎右衛門が、農学者で郡奉行だった陶山訥庵の薫陶を受けて薩摩に単身渡り、サツマイモを持ち帰って訥庵とともに植え広めた。「孝行芋」の命名には「親子ともどもサツマイモのおかげで生きられる」と感謝した島の人たちの気持ちがこもっているように思える。

ちなみに、朝鮮半島へのサツマイモの伝播は、中国からではなく、対馬から伝わっている。ほかにも、一六九二年には江嶋為信が四国の今治藩へ、一七一一年には下見吉十郎が瀬戸内の大三島へ、一七一六年には島利兵衛が京都にサツマイモを伝えるなど各地で栽培が広まり、そして中国地方には一七三二年に井戸平左衛門公の英断でサツマイモがもたらされ、領民を飢饉から救った。

十分でない地域の人々が米に代わる作物を何とかして求めようとした懸命さが伝わってくる。そして、事例を見ていくと、民間人が植え広めた地域よりも、役人がかかわって施策として取り組まれた地域ほど、恩恵を受けた人たちがはるかに多くなっている。だからこそ、代官だった井戸公が自らサツマイモ導入



△昨年12月に市民会館で開催された「お芋博覧会」の「ウマ芋レシピコンテスト」。サツマイモの可能性の大きさが感じられた。

を決意し実行した功績が、いかに貴重で偉大で、価値あるものだったかが際立ってくる。鹿児島県では前田利右衛門が「甘諸翁(からいもおんじよ)」と呼ばれて「さつまいも伝来三百年祭」も利右衛門の偉業を称える形で二〇〇五年に行われた「さつまいも発祥の地」の記念碑も建てられているが、利右衛門より七年早く、琉球王に所望してサツマイモを種子島に導入した種子島の島主種子島久基の力が大きかったように思われてならない。

久基は島津藩(薩摩)の家臣でもあり、種子島でサツマイモの栽培を成功させた後、薩摩への普及にも尽力している。種子島では一九九八年に「からいも伝来三百周年記念式典」を行っており、「日本甘諸栽培初地之碑」も

ある。

サツマイモで命をつないだのは江戸時代の人々だけではない。太平洋戦争中も南洋の戦地で栽培され、兵隊たちは飢えをしのいだ。唯一の本土戦の地である沖縄でも、多くの人がサツマイモを食べながら命をつないだ。戦時には全国の学校の校庭がサツマイモ畑になり、東京の日比谷公園でも、国会議事堂前でもサツマイモが栽培された。ベトナム戦争でアメリカ軍を打ち負かしたのは「ベトナムの民の勇氣とサツマイモだったのかもしれない」という話もある。今でも、食糧難にあえぐ世界中のあちこちで、人々の命をつなぐためにサツマイモは植え広められつつある。

戦後、世界中から食べ物が入ってくるようになり、日本人はいつしかサツマイモを忘れていった。農林水産省の統計を見ると、サツマイモの作付面積は昭和十六年から増加し二十四年に最高の四十四万ヘクタールとなるが、その後減少の一途をたどり、現在はわずかに四万ヘクタールに過ぎない。出雲市湖陵町の西浜いもも、戦後生産量が著しく少

なくなつた時期があつた。

近ごろではサツマイモは健康食、美容食として注目され食べられてはいるが、消費量はそれほど多くはない。しかし、家庭菜園をはじめ、畑を作っている人の多くは毎年畑のどこかに、あるいは田んぼの空き地の一角にサツマイモを植える。私の家庭菜園でもサツマイモは欠かさない。そして、収穫のときにはいつも井戸公や先人たちの思いながら収穫している。

全国の五百基を超える井戸公への感謝の気持ちを伝える石碑。これらの石碑を建てた人たちはサツマイモを通じて「食べることの大切さ、食物への感謝」を思い、サツマイモを通して「命の尊さ」を見つめていた人たちだったのだ。

この稿をまとめるにあたって、次の文献を参考にしました。

①「野國總管甘諸伝来400年祭記念誌 野國總管」(沖縄県嘉手納町「野國總管甘諸伝来400年祭実行委員会」編)、②「甘諸の歴史」(宮本常一著/未来社 日本民衆史7)、③「サツマイモと日本人 忘れられた食の足跡」(伊藤章治著/PHP新書696)

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて ⑬ 米子市「迎接院」の心温まる芋代官祭

大田町 石 賀 了

六月二十一日、米子市の迎接院(伊藤信道住職)というお寺で芋代官祭が行われると聞き、お参りしてきた。

米子市には四基の井戸公碑があり、そのうちの一基が夜見町の迎接院にある。万延元年(一八六〇年)に建てられ、二段の台石の上に七〇センチの碑石が乗って「泰雲院殿義岳良忠大居士」と彫られている。五人の世話人の

名前が彫つてあるので、地域の皆さんが建てたものだろう。米子市の他の三基と同様、市の文化財に指定されている。

迎接院の祭りは、夜見一区自治会(足立康郎会長)の主催で行われ今年二十三回目。この祭りは予想外のことばかりで、驚きと感激の二時間半を過ごした。まず、本堂に展示された数々の資料にびつくり。ご住職の息子の晃希さん(現在高校生)が小学五年のときに調べたという弓浜半島の井戸公碑の分布や井戸公の功績、「井戸平左衛門とさつま芋」の紙芝居が目を引き、ほかにも井戸公にまつわる書籍などがずらりと展示され、さながら「芋代官資料展」の趣き。

▶五十人以上が参列した供養祭



境内で自治会の女性部の皆さんが芋がゆを調理している間に供養祭が始まったが、米子市教育委員会の岡文化課長をはじめ六人の来



△伊藤住職の紙芝居

賓が出席する中、子どもたちが石碑の前にサツマイモを供えた後ご詠歌が奉納され、読経があった。このとき石碑を囲む人は五十人を超えるにぎやかさ。読経の後、参加者全員が焼香したが、第二部で登場する幼稚園児も含め、百人を超える人が焼香の列を作った。後日の日本海新聞の記事によると、参加者は百十八人とある。

盛大な供養祭が終わると、隣の建物で「第二部」が始まった。広い会場に集まった皆さんに芋がゆがふるまわれ、ご住職が「芋代官切腹」の紙芝居を披露。この紙芝居は昭和十八年に東京都

の社団法人農山漁村文化協会が発行したもの。ご住職の配慮で、途中にオリジナルの絵を入れ、現在も世界には食糧難の子どもたちがいることを紹介するなど、現代版にアレンジされていた。続いて、すぐ近くの私立「かもめ幼稚園」(小早川君子園長)の二十四人の子どもたちが登場。八年前に幼稚園で作曲したという「いもだいかなさま」の歌を元氣よく歌った。この日は歌だけだったが、本来は「セリフ」

と「振り」がついており、代々の園児が歌い継いでいるという。三番の歌詞は「さつまのいもがあつたから おなかいっぱい食べられて よみにすんでるひとたちは いまでもかんしゃをわすれない」というもの。このあたりで私は感極まってしまった。最後を飾ったのはご住職の妻をリーダーにした「寺子屋一座」の女性たちの踊り、「貝殻節」と「花笠音頭」。「花笠音頭は芋代官とは関係ないけど、楽しいからいいですよ、皆さんも一緒に踊りましょう」とにぎやかに踊って、なごやかに祭りが締めくくられた。



▶かもめ幼稚園児が元氣に歌った「いもだいかなさま」

「芋代官祭」というと読経、法話など堅い雰囲気を感じする(もちろんそうした祭りも続けてほしい)が、この祭りには最初から最後まで「楽しくお祭りし、感謝しよう」という気持ちが込められており、地域をあげた取り組みとして長く続いている理由がそのへんにあるように思われた。

肩に力を入れず、楽しんで井戸公の遺徳を偲ぶ祭りがあることがうれしかった。

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて⑬

お芋博覧会で「芋代官まつり」

大田町 石 賀

了

「お芋博覧会」が十二月七日、大田町の職業訓練センターであり、催しの柱の一つとして「芋代官まつり」も行われた。

「お芋博覧会」は大田、川合、久利、大屋の四町でまちづくりを進める中央ブロックまちづくり委員会の「お芋開発プロジェクト実行委員会」（森山護会長）主催で、ゆくゆくはサツマイモ

を使って産業振興につなげたいというねらいがある。そのため、各町でサツマイモの植え付けや収穫体験、レシピの考案、グリーンカーテンの普及などに取り組んでおり、その集大成として「博覧会」を開いたもの。昨年

に続いて二回目だ。会場のテント村では焼き芋や大学芋、てんぷら、各地域で開発しているメニュー

（代官芋のぜんざい、

サツマイモのオレンジ煮、お芋ごはん、芋ようかんなど）を販売、ステージでは石見神楽やダンスなどが次々に披露され、寒い日だったにもかかわらずにぎわった。

サツマイモを使って地域の活性化を目指すのは、もちろん、享保年間に芋代官・井戸平左衛門公が中国地方では最初に薩摩からサツマ



▷紙芝居を作った四人の若いお母さん



△井戸公を描いた朗読劇を群読する劇研「空」

グラムがあった。まず、「ありがとう芋代官」「うまいもソング」を大田市少年少女合唱団が発表したが、この二曲は中央公民館の伊藤裕子主事の作詞作曲によるもの。私はこれまで芋代官の歌を笠岡市と米子市で聞いたことがあるが、やっと地元の大田市にも歌ができたことを大変喜んでいて。ぜひ歌い継いでもらいたいと思っている。

伊藤主事は、「CDもあるので、曲を流しながら子どもたちに紙芝居を見せてほしい。」と話している。三つ目は朗読劇「はるかな時を越えて〜江戸から来た人」の上演。当協会の理事でもある詩人の洲浜昌三さんの詩を演劇サークルの劇研「空」が群読した。ほぼ史実に沿った内容だったので、井戸公の苦勞や功績を再認識するいい機会になったと思う。

イモを導入したことに注目してのこと。何年前か前、大田市で生産されるサツマイモを「代官いも」として特産化しようという動きがあったようだ。しかし、具体的な取り組みには至っていないため、大田市だからこそサツマイモと芋代官を結びつけた取り組みをしようという意図もある。そこで、この地方のサツマイモの「起源」をもう一度再認識しようとして「芋代官まつり」も取り組まれたものと思う。

芋代官まつりでは四つのプロ



△「うまいもソング」を振りつきで歌う大田市少年少女合唱団

代官いもで地域の活性化を目指す実行委員会の、サツマイモの「起源」を大切に、大田市だからこそサツマイモの特産化を目指そうとする心意気を高く買いたい。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて ②〇

再建されたものも多い川本町の井戸公碑

大田町 石 賀 了

川本町には30基の井戸公碑があり、それは平成2年発行の「川本町文化財シリーズI 芋殿さんの碑」に詳しい。これは川本町歴史研究会の最初の発行物であり、初代の天津角郎会長をはじめとする64人の会員の皆さんの熱意が伝わってくる。

川本町の井戸公碑を調べたため、発会時から同会の会員で元川本町教育長の森脇登さんの案内をいただくことができた。森脇さんは江川に近いところに住んでおられるので、江川沿いの石碑を紹介していただいたのだが、だからこそわかったことがある。それは、度重なる江川の

氾濫から地域を守るために行われた集落移転の際に、井戸公碑も家々とともに移転し、再建されているということ。旧碑には痛みや激しいものもあるので、これはうれしいことだった。

森脇さんがお住まいの三島の井戸公碑も再建されている。江川に添って走る県道40号沿いの龍源寺の境内にある「井明府之碑」だ。初代は明治22年、道路沿いに福光石で建てられたが、平成7年の宅地等水防対策事業で移転を余儀なくされた。見た目はすっかりしていたが移転には耐えられないとの判断から、寸法、形、彫られている文字は

そのまま再現し、御影石で再建された。95センチの碑石後面には再建した経緯を彫った碑文もあり、今後長く地域の皆さんに大切にされていくだろう。旧碑と同じように、1段目の台石にある「三嶋地区のみんなが力を合せて」を意味する「三嶋中」の3文字が誇らしげだ。



△川本町最古の笹畑の「泰雲院殿碑」

こちらは高手にあるので移転はされずに今日まで来ており、福光石ながら持ちこたえている。67センチと小ぶりの石碑には「泰雲院殿碑」と彫られており、

その周囲に飾りの野線も入っていておしゃれだ。左右の側面にかなり長い碑文もあり、井戸さんの功績が詳しく彫られているが、「芋殿さん

の碑」編集時点でもすでに全文は読めない状態だったようだ。3段の台石の下に、自然石を

はめ込んだ高さ約1メートルの石垣が組まれているが、これは6年ほど前に自治会の皆さんの力で修

理されたと聞いた。台石のあちこちも補修がされている。1段目の台石にはもちろん「笹畑中」の文字がある。

川本町で井戸さんといえば、忘れてならない人がいる。株式会社江ノ川開発の社長、山口嘉夫さんだ。山口さんは井戸さんを描いた小説、「芋代官切腹」(昭和17年に川本町出身の小笠原秀昱さんが執筆されたもの)を読み易い現代かな遣いに改めた「大森哀愁浪漫」を、平成20年に石見銀山の世界遺産登録を祝って発刊された。

上下2巻ではあるが非常に読み易く、一気に読める。川本の若者たちが主人公になってサツマイモを手に入れる物語になっているのも興味深い。



△大きさ、文字はそのままに御影石で再建された川本町三島の「井明府之碑」

川本町で最古の井戸公碑は、

嘉永元年(1848年)のもので、材木地区と笹畑の碑が同年の建立だ。材木地区のものは残念ながら確認できなかったが、笹畑の石碑は森脇さんに案内していただいた。ふれあい公園笹遊里(ささゆり)の近くの旧道との交差点に立っている。



▷上下2巻の「大森哀愁浪漫」

もう一つの山口さんのエピソードは、川本大橋西詰めに立っている大きな看板だ。山口さんは湯谷温泉弥山荘を経営されていた時期があり、そのころに建てたと言われたが、看板には「ゆだに温泉 いも代官と丸山城主がよなく愛した湯」と大きな文字で書かれている。これも一つの井戸公頌徳碑と言ってもいいのではないだろうか。